

触媒懇談会ニュース

触媒学会シニア懇談会

「パラグラフ・ライティング」を担当して

服部 英

北大を退職して7年余も経過してしまっただが、この間、定年前に思い描いていたものとは違った生活を送ることになってしまった。惜しくも亡くなられた奥原敏夫教授のところでの実験のお手伝い、上田渉教授から研究推進支援教授としてのオファーを戴いたり、国立シンガポール大学における2単位の講義、国際石油協力センター(JCCP)からのサウジアラビアへの派遣、小野嘉夫先生からの「Solid Base Catalysis」共著のお誘いなどで、瞬く間に時が過ぎてしまった。これらの中で、全く思いもしなかったことは、北大の理学研究科の非常勤講師として、なんと英語の講義を担当していることである。高校時代から英語は苦手と思っていたので、全く予期しなかった経験である。

北大も国際化への潮流に乗るべく、5年ほど前に、大学院で「国際理学コミュニケーション特論」という名の講義を新設した。口頭発表の仕方を指導する授業と論文の書き方を指導する授業の各1単位からなる講義で、口頭発表の方はnative speakerに担当してもらい、書き方の方は英語を専門とする講師に依頼するもくろみであったらしい。しかし、書き方の方を担当する人がな

かなか見つからず、シラバス提出の期限間近になって、どこをどう通ってきたのか、私のところに話が回ってきた。退職後、論文審査を比較的丁寧に来れるようになってから気がついたことの1つに、段落のつけ方が不適切なために論旨をなかなかフォローできない論文が多いことであった。これも新しい経験と思い、「英語で論文、レポートを書くためのパラグラフ・ライティング」と副題をつけた講義をすることになった。のちに、口頭発表の方は、予定講師まで決まっていたが、ついに開講されず、国際理学コミュニケーション特論は片肺飛行のまま5年間過ぎてしまった。

シラバスには、次の説明と参考書を記載した。

【授業の目的及びねらい】英語で論文やレポートなどの文章を書く際に重要なのは、論理的に表現することである。一つのテーマに関連する文の集まりであるパラグラフの構成には、あるきまった型があり、その書き方によっては、文章全体の論理性と説得性に大きな差異が現れる。本講では、論理的なパラグラフを書くために必要な基本事項を解説し、演習形式もとりにいれて、パラグラフ・ライティングを習得できるよ

うにする。

【参考書】「理科系の作文技術」木下是雄（中公新書）；橋内 武「パラグラフ・ライティング入門」（研究社）；「パラグラフ・ライティング指導入門」大井恭子（大修館）；「英語論文・レポートの書き方」上村妙子、大井恭子（研究社）；「英語パラグラフ・ライティング講座」ケリー伊藤（研究社）；「The Process of Paragraph Writing」Joy M. Reid (Prentice Hall Regents)；「Effective Academic Writing 1, The Paragraph」A. Savage, M. Shafiei (Oxford Univ. Press)

「理科系の作文技術」木下是雄（中公新書）をみて、昔読んだことを思い出す方が多いのではないかと思う。1981年初版のロングセラーである。その中に「パラグラフ」について書かれた17ページから成る章があり、その内容を基本として講義内容をつくっている。書店には、おびただしい数の英作文に関する参考書がならんでいるけれど、多くの書は、一文(sentence)をいかに上手に書くかに重点が置かれ、1つのテーマについて書いてある文の集まりであるパラグラフについて書かれている本は少ない。講義をするにはそれなりの準備をと思い、四苦八苦して上記の参考書をはじめ何冊かの本を集めることからはじめた。英書にはそのまま教科書で使える書物が何冊かあるが、和書には教科書で使うに適した書は見あたらなかった。ただ、ここ2,3年の間に、「パラグラフ・ライティング入門」「パラグラフ・ライティング指導入門」が発

刊されており、我が国でも、一文の英作文よりパラグラフの構成に力点を置く英語教育がはじまる気配が感じられる。

シラバスに書いた「パラグラフの構成には、あるきまった型があり…」とは、文は主語と述語で成り立っているように、パラグラフはトピック・センテンスとそれを説明するサポーティング・センテンスで成り立っているという意味である。次のような型のパラグラフが標準的な構成となる。

トピック・センテンス

サポーティング・センテンス 1

サポーティング・センテンス 2

サポーティング・センテンス 3

.....

コンクルーディングセンテンス

すべてのパラグラフが必ずこのようになっているかというところでもない。主語や述語のない命令文や感嘆文があるのと同じように、トピック・センテンスとサポーティング・センテンスがないパラグラフもあり得る。また、トピック・センテンスがパラグラフの冒頭になことも多い。トピック・センテンスの言い換えであるコンクルーディング・センテンスは省略されることが多い。

パラグラフの構成は、ある程度柔軟性があり、例外も多いが、一番重要な原則は

「One idea, one paragraph」といわれていることで、「同一パラグラフ内は同一テーマに沿った文のみで構成する」がいわばゴールドンルールである。「大分長く書いたからこの辺で改行するか」、「ここで改行した方が息継ぎによいか」、あるいは、「文章

のトーンを変えるために改行するか」などの理由で改行してはいけないというのが one idea, one paragraph の意味である。1 つの idea を説明するサポーター・センテンスの数は 3~7 文になることが多い。ということは、パラグラフのテーマとしては、3~7 文で説明できるテーマが適切であるということになる。あまりにも大きなテーマを持った文や説明の必要のない文は、トピック・センテンスには適さない。

アメリカ合衆国やイギリスでは、小学校から大学までの英語の授業において、パラグラフ・ライティングが徹底的に教えられと書いてある本が多い。特に、大学の授業で提出するレポートは、パラグラフとパラグラフの集合であるエッセイ（小論文）の適切な構成が要求されるようである。英米の大学に留学する学生が受けなければならない TOFLE テストのライティングでは、パラグラフの構成、エッセイ（小論文）の構成が重視されるといわれている。パラグラフ・ライティングの教科書が多いこともうなずける。ただし、パラグラフの構成が原則から外れ、とても読みにくい欧米人の論文を目にすると、どの程度力点を置いて教育されているか怪しいと思うこともある。

パラグラフを構成する文の中で一番重要なトピック・センテンスの位置については、「In most academic writing, the first sentence of each paragraph is the topic sentence.」のような説明が多い。パラグラフの冒頭の文だけを拾い読みすると、記事の概要を短時間でつかむことが出来る、いわゆる速読が出来ることになる。第 1 文にトピック・センテンスを置くと、そのパラグラフで何を言いたいのかを予期して読む

ことができ、論旨をスムーズに理解することが容易になる。

トピック・センテンスの要件としては、その文に対して何らかの質問を発することができる文であることがあげられる。例えば、Abraham Lincoln was President of the U.S. during the Civil War. は、事実の記述で、何の質問をも喚起しないのでトピック・センテンスとしては適さない。Abraham Lincoln, the president of the U. S. during the Civil War, was assassinated by とすれば、「なぜ?」、「誰に?」、「どんな状況で?」など、いくつかの質問を喚起する文になる。質問の回答と説明がサポーター・センテンスとなる。トピック・センテンスは controlling idea を含まなければいけないといわれているのはこのことである。

日本の文章では、トピック・センテンスをパラグラフの第 1 文にもってきにくい場合が多いように思われる。この理由を、木下是雄は、日本文の構成によるのではないかと書いている。英語では主語と述語が密接して文頭に来るが、日本語では述語が文末にくる。文でもパラグラフでも、最後まで読まないとなんが書いてあるか分からないのが日本語の特徴である。しかし、木下是雄は、理科系の作文では、たとえそれが日本語で書かれているものでも、トピック・センテンスをパラグラフの最初に書くことを薦めている。まったく、その通りと思える。

文芸書では、パラグラフ・ライティングの原則から外れる場合が多い。原則に則っている文章が続くと、単調になり味のない文章になりがちであり、小説、随筆な

どの文芸書に似つかわしくなくなるからであらう。ただし、パラグラフ構成の原則に見事にあった古典があることが「パラグラフ・ライティング入門」に載っている。それは、清少納言の「枕草子」である。

古文では段落がなかったはずなので、改行をつけた形では書かれていないが、「枕草子」の第1段は、4つのパラグラフから成り立っていると考えることができる。

1. 春はあけぼの。やうやうしろくなり行く。山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。
2. 夏はよる。月の頃はさらなり、....
3. 秋は夕暮れ。夕日の
4. 冬はつとめて。雪の降りたるは.....

いずれのパラグラフでも冒頭はトピック・センテンスで、各々の季節で何が一番良いかを体言止めで表している。その直後には、良い点の描写や作者のコメントが書かれている。パラグラフ・ライティングの典型である。これに対して、「徒然草」は日本的な文章構成になっていることは、誰しも認めるところであらう。

以上のような話を7~8回の講義でして、最後にアブストラクトとイントロダクションの構成のしかたについて話をする。最終回には、「各自の研究を full paper として投稿すると仮定したとき書くアブストラクト、あるいは、イントロダクション」を提出させて、成績の評価としている。アブストラクトは1つのパラグラフで書くのが原則であり、パラグラフの標準的な書き方が、イントロダクションはエッセイ（小論文）の書き方が適用されるので、パラグラフ・ライティング、エッセイ・ライティングの理解度を測るのによい格好な例となるから

である。初回の授業の時に同じ課題で提出してもらおうアブストラクトやイントロダクションに比べると、格段に形の整った文章を提出する学生が半数以上いると、講義をして良かったと満足することになるが、あまり教えた甲斐がなかったときには、ひどくむなしい思いをする。